

Title	廣津和郎と「洪水以後」
Sub Title	
Author	坂本, 育雄(Sakamoto, Ikuo)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1987
Jtitle	三田國文 No.8 (1987. 12) ,p.22- 34
JaLC DOI	10.14991/002.19871200-0022
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19871200-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

廣津和郎と「洪水以後」

坂本育雄

廣津和郎に「若き日」という、作者自身がかんがりの愛着を示した小説がある。もと大正八年一月「太陽」に「悔」として発表されたものであり、以下数度の改稿を経て、「若き日」として定着した。この改稿の経過自体に、作者のこの作品への愛着の程度が窺われる。岩波文庫（昭26）には著者の文壇的処女作「神経病時代」と併録され、その「あとがき」に「〔若き日〕は私の青年期の『自伝』の一節と思つて読んで頂いてもよい」とあり、それは廣津の数多く発表された私小説とは趣を異にする一種の「白樺」派風青春自伝小説であった。（本稿の「若き日」の引用は岩波文庫版による）

「若き日」を『自伝』の一節」として読む場合、「若き日」が「悔」以上に事実即した態度を以て書かれていることが先ず注意される。例えば「悔」でローマ字の頭文字が使われている固有名詞は、殆ど実在のものを思わせる仮名、又は実名に変えられている。S氏→黒川調六→香雨（黒岩周六→涙香）、A→中学→麻布中学、W→大学→早稲田大学、Nさん→永田教授（永井柳太郎）、K・K氏→清見貫山等々といった塩梅である。この最後の清見貫山が茅原華山であり、この小説で或る役割を担わされているだけでなく、

廣津自身がこの小説のドラマの終焉時から約二年後には、華山の主宰する雑誌「洪水以後」の編輯部に文芸時評担当者として入ることになる。但し廣津が「洪水以後」に関わったのは僅か三ヶ月余、創刊号（大5・1・1）から第十号（大5・4・11）までであり、その二ヶ月後第十四号でこの雑誌は終刊となった。

茅原華山と「洪水以後」、及びその前身たる「第三帝國」については、華山の孫茅原健氏の精力的な調査があり、それを基礎として、今後日本近代思想史の立場から更に検討が加えられるであろうが、少なくとも「洪水以後」全十四巻が今日に示す意義の殆どは、各巻僅々一〜三頁を占めたに過ぎない廣津和郎の時評が担っていると言つても過言ではなく、逆に言えば廣津和郎という文芸評論家を世に送り出したこと（1）で「洪水以後」は記憶さるべき存在になった、と言えるのである。（因みに十号分の総頁四三四頁に対して廣津時評は僅か二〇・五頁（2）を占めるに過ぎない。）

この廣津が始めて試みた文芸時評に於いて、それ以後の廣津の全文芸活動の基盤が確立されたのであり、ここに展開され披瀝された彼の文芸と人生に対する基本姿勢は、遠く晩年の松川裁判批判にま

で及んでいると見てよい。しかし今は、廣津の文芸活動の最初の最も充実した時期―大正五年から九年に至る業績との関係で、この「洪水以後」の「時評」を捉えてみたい。

× × ×
だがその前に、一応茅原華山と「第三帝国」及び「洪水以後」について瞥見しておこう。

「第三帝国」の創刊は大正二年十月十日、主盟茅原華山、編輯主任石田友治のコンビで刊行された雑誌だが、二年後華山に創刊趣旨を裏切るような言説があったとして石田と対立し、主導権争いの結果、華山が「第三帝国」を出て「洪水以後」を創刊するという一幕があった。石田は大正四年十一月二十九日「第三帝国」の号外を茅原華山絶縁号として発行し、その冒頭に自ら絶縁の経緯を説明した。「何故に『第三帝国』は」(茅原華山と絶縁せしが)

「第三帝国」創刊時の理念を創刊号「志を述ぶ」、前記絶縁号石田論文等によって見るに、政治的には「小日本主義」「民本主義」、思想的には「個性中心主義」「人格主義」「平和主義」を掲げ、新理想主義による「君民同治」の新帝国を建設するというにあった。総じて大正デモクラシーの先駆的理念を反映していたと言える。「然るに茅原華山氏は、いつとなく新理想主義、民本主義を『旧い』と言ひ出すやうにな」り、「⁽⁴⁾歐洲戦争起るや『戦争の嘆美』となり、『火の洗礼を受けよ』と論じ、創刊当時は反帝国主義、平和主義者であった茅原氏は、打つて変つて帝国主義者、戦争讚美論者となった」(石田前)

「第三帝国」には確かに大正デモクラシーの最も基本的な理念が語られていた。小日本主義、民本主義の主張は勿論、浮田和民が熱

っぽく説き続けた言論の自由論(①)(②)(各号)、江木衷(③)、大場茂馬(④)、馬場孤蝶(⑤)による人権尊重の立場からの裁判制度の批判、鈴木文治による労働者の団結権の主張(⑥)、平塚らいてうの婦人問題(⑦)等々は、デモクラシー存立の根幹に迫り、その論旨は今日にも十分通用するものだった。従つて基本的にはブルジョア・デモクラシーの最も良質の部分を含んでいただけでなく、華山の否定者である大杉栄を始め、伊藤野枝、安倍磯雄、大山郁夫、堺利彦、安成真雄等の無政府主義者社会主義者にも多くの誌面を提供した。デモクラシーが、己れを克服する思想との共存を許容するという寛大の原則が貫かれていたと言えるだろう。それだけに華山の所謂「変節改論」(⑧)は、「第三帝国」の存立に関わることもであり、分裂は必至であつたと見ることが出来る。前記大杉以下の主義者達は「洪水以後」には登場せず、「洪水以後」の思想的後退は明らかであった。

しかし果して華山は「変節」したと言えるのだろうか。華山の自伝「平生の懺悔」(大5、6)によると、元来彼は日露戦争に対する主戦論者として、内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦らの非戦派を退陣せしめた黒岩涙香によって萬朝報に迎えられた、という経歴の持主だった。黒岩の寵を得た華山が、五年に亙る欧米視察の旅を終えて帰国すると、今度は平和主義による民本主義を唱え出すのであるが、それが又如何に表面的な時流への迎合に過ぎなかったかは、既に「第三帝国」での変身ぶりに見られた通りである。謂わば限りない変転が華山の身上と見られなくなかった。

ある思想家の真価は、その女性観を閲すれば明らかになると言われているが、これが又華山に於いて尋常一様ではなかつた。「若き日」に、主人公の恋人千鶴子が、新婦朝者の清見貫山(華山)の許に

出入りし、そこで貫山から「これからの女性は先づ第一に経済的に男性から独立する覚悟がなければならぬ」「冤に角常に男性を敵として戦ふ覚悟がなければならぬ」「日本の女は何でもない事に恥しがるのがいけない」云々と教えられたと言うのに対し、主人公が、その言葉自体は否定できないにしても、「清見貫山が若い娘にさういう事をいひ聞かせて何処まで責任を感じてゐるのか」と自らに問い返す所がある。そこに主人公は、何ら根柢のない言葉だけの「新思想」の危さと軽薄さを敏感に感じとっているのである。

では貫山ならぬ華山の女性観は実際如何なるものだったろうか。これを一応若干の文献について関するに、華山の他の言説と同様、論旨が曖昧で明確に掴み切れない部分があるが、それでも確かに帰朝後の時期のものが最もラディカルであり、「若き日」の叙述に照応しているようにも思われる。例えば注(7)の②の中で華山は次のように言っている。「此の生活の前に対つては、人間は性の区別はない。男子も自己を發展させなければならぬ。女子も充実したる生活を求めなければならぬ。積極的に進んでゆく前に、自我の發展をさまたげるものがある時にはそれを破壊して進まねばならぬ。」「婦人と雖も充分に自己を發展しなければならぬ。」「華山はここではこのように言つて、熱っぽく女性を励ましてゐるかに見える。所が他の時期のものでは、概ね男子と女子の役割を限定し、女の分を守ることを説く家族制度の擁護者たることを隠していない。華山の女性論も、例の如く一貫した主張が見られないだけでなく、何れの場合でも、女の解放が男の解放と不可分のものであるとする発想が欠落しており、そんであれば「若き日」の主人公の危惧も、それなりの根柢があった、とするべきであらう。

こうしてみると、華山がたとえ自らを「デモクラット」「急進的自由主義者(懐懐^{平生の})」に擬したとしても、その変転極まりない、而も曖昧な論調の中から、彼の旧い体質を探り当てるのはさして困難でもないように思われる。唯、華山をどう評価するかに関わらず、華山の文章が「華美艶麗を極め」たものであり、それを以て「全国の青年を渴仰」せしめた(安達元之助「私の見た華山」)という事実は、凡ゆる華山論者の認めざるを得ない所だった。尾崎士郎も金子洋文も、このような華山の文章や演説の華麗さに魅せられ、「第三帝国」や「洪水以後」に投稿して来た地方青年だった。彼らが当時何れも、政治と文学への二つの志向を併せ持つ青年だったことは、この場合特に示唆的だった。何らかの意味で現実変革を志す政治青年が、時に感傷的な慷慨調のある種の文学的表現に憧れるのはあり勝ちのことだからである。尾崎(「第三帝国」)⑩、金子(「洪水以後」)⑩の送り来つた原稿は何れも直ちに華山によって揃い取られ、活字化されているが、その内容は共に、人間尊重の立場からの、教育界の現況に対する批判をその核としており、その反軍国主義的反国家主義的傾向は、必ずしも華山の体質に合致するものではなかった。然るに華山が、このように己れと異なる意見の持ち主(特に青年)を包容する例が他にも数多くあつて、これを華山の「茫漠とした人間的スケールの大きさ」(勢多左武郎「続『第三帝国』から『洪水以後』へ」昭48・3「たちばな」)として評価する向きもある。又、大杉栄は注(5)の②で、華山を主盟と仰いでいる人達の中に、「華山の部下として似合はない聡明な人達」のいることを認め、中村孤月(「第三帝国」)文芸時評担当者、松本悟郎、野村隈畔、石田友治の名を挙げている。廣津和郎がその「似合はない聡明な人達」の最たる存在だったのは言うまでもないことである。

廣津和郎は「洪水以後」の時評によって文芸評論家としての位置を定めた。⁽¹⁾然るに廣津和郎と「洪水以後」という雑誌の取合せ程奇妙で皮肉なものはない。何故なら「洪水以後」の主盟茅原華山の精神と思考のあり様と、廣津のそれとは根元的に相容れないものだったからである。だが華山は廣津を文芸時評欄の担当者に起用し、廣津は職を求めようとする人間としては極めて我儘な条件を出して、これを華山に認めさせている。(年月のあしおと) ⑤参照) そこには、早稲田派がよく書いた求職物語に見られるような、求職に際しての屈辱感や惨めさの影が全くなかった。このことは廣津の「洪水以後」の時評の内容そのものと照応するだろう。

「洪水以後」の創刊は大正五年一月一日である。大正五年が、文芸上の新旧交替期だったことは文学史の示す所である。翌六年にはロシア革命が成り、新しい時代の幕明けの機運を遠く窺いながら、日本の文壇では佐藤春夫が「病める薔薇」を、廣津自身が「神経病時代」をそれぞれ文壇の処女作として発表し、萩原朔太郎が詩壇を驚倒させた革命的詩集「月に吠える」を上梓して、近代文明が人間に齎す神経の痛みや精神の歪みを形象化した。廣津は「洪水以後」創刊号で、いち早く新しい時代の到来を感じし、それが自然主義革命に匹敵する文学革命なることを予言した。(それが後に新現実主義と総称されるものだ) 廣津の、生涯を通じて変らない時代に対する明察がここにある。この前提に立つて廣津は、始めて文芸時評の筆を執る者とは思えない、流行や権威に対する遠慮会釈もない解析を試みた。トルストイは世界に於ける流行であり権威だった。相馬御風は、廣津にとっては早稲田大学英文科の大先輩であり、親しくそ

の講義を聴いた教師でもあった。この二人に対する批評の最も蔽しかったことは、「洪水以後」に於ける廣津時評全体の論調が如何なるものであるかを窺わせるに足るものである。このことは、創刊号に於ける彼の批評態度の表明とも関わっているだろう。

彼は先ず「プリセンチメントなしに創作に接する事」を約し、「ペンと鉛筆」(下段コラム欄)で「私は初めから或る標準を立て、批評したくない。(中略)厭世主義者だからと云つて賞めたくない最高の思想を唱へてゐる人だからと云つて賞めたくない」と書いてゐる。——「プリセンチメント」や「標準」を排除するということに即ち、既存の権威によつて物を語らないということである。ここに新時代の到来を予覚した新人らしい、いかにも大正リベリズムの精神を体現した人らしい自信と抱負とを聞くことができる。

廣津は創刊号で「ラ・テール」という小さな雑誌から、木村莊太の「一つ木の家」(大4・12)を取り上げて好意的に批評したが、一方第二号では、流行作家谷崎潤一郎の「神童」を殆ど完膚なきまでに酷評している。世評とは一切関係のない廣津独自の鑑賞がそこにはあった。今、公平にこの両者を比較すれば、芸術の完成度では「一つ木の家」は到底「神童」に及ぶものではない。しかし廣津の鑑賞は、芸術をその完成度に於いてのみ評価する態度を、その後と雖も一貫してとっていない。「神童」の少年の心理に「自然な処」を発見できなかった廣津は、その如何にも手馴れた手法でそつなく纏め上げられた「神童」に、「創作の嚴肅さ」を感ずることができず、却つて「一つ木の家」の粗削りな、性の憂悶を無器用に綴ったその「質朴な筆」を愛したのである。この廣津の対照的な作品批評の中に、「洪水以後」の時評に臨んだ廣津の志の程を窺い、知ること

ができる。

「権威」に依つて物を見ないということは、「絶対に自由な心と眼によつてすべての物を観、すべての物を判断しようとする態度」(15) (片岡良「廣津和郎論」大) に違いないが、その「絶対に自由な心と眼」(15) (7「國語と國文學」大) に違いないが、その「絶対に自由な心と眼」にも、何か自律的な基準というものはあるのではないか。橋本迪夫氏は、全集八卷月報④の「解説」で「彼自身の批評の尺度に何を持つて来たか」と問い、「結局それは批評家の素質である」と答え、「彼等は常に存在す」(大6.2) という評論がこれを証明している、と述べている。しかし、批評の尺度を単に「素質」に求めるということが言えるためには、尚若干の注釈が必要である。「彼等は常に存在す」の中で廣津は、彼の軍隊生活の経験から、如何なる社会でも「人間の素質に対する感覚」が「私にとつて彼等を見る全部となつた」と述べている。この場合人間評価の基準は、学問や教養でもなければ、放蕩や悪事ですらない。軍隊のような極限状況下では人間の素質が顕われ易い。娑婆では相当の悪事を働いて来たらしい無教養な博徒出身の兵隊の中に、「何のたくらみもない」という美質が発見される代りには、万事利口に立ち回る大学出身の兵隊の卑しさが指弾されることもある。文学の評価も同じことであるに違いない。「たくらみ」は「不自然」なのであり、廣津は別の作家論で「虚偽」とも「いや味の虚飾」とも称したことがある。人間評価に学問や教養が無効だったように、文学評価でも、概念や理想や党派が問題なのではなく、素質の内容の吟味が重要な課題となる。

「若き日」の(丙)に、「悔」にはなかつた次の一節がある。「私は理想の炬火を前方にふりかざして突進して行くやうな作家や思想家よりも、眼の前の現実から静かに虚偽と欺瞞とをつまみ出して行くや

うな傾向の人達に心を惹かれたわけである。」——ここに廣津和郎という文学者の一切が語られている。チェホフ、志賀直哉、徳田秋声等彼の最も愛した作家の作品論には、すべてこの言葉のヴァリエーションが適用されている。それが廣津自身の中にあるものの投影に過ぎなかつたことは言うまでもない。——唯この場合、それが廣津に於いて可能となるためには、自己内部の実感(「若き日」で言う「リズム」)に対する絶対的信頼がなければならない。「リズム」は「若き日」の光蔵のような政治青年の解し得ざるものであつた。従つて廣津の批評が「実感の射程外に位する問題に対しては有効性をもたない」という評も勿論成り立つのである。しかし廣津の批評は生涯その「リズム」に依拠していたので、彼の松川裁判批判は、その「リズム」の根拠を、法律という文学外の領域で証明したに過ぎないのである。——

理想を前面に押し立てて進む者は、時に別の理想と争つて後退したり、現実からの手厳しい復讐に出合つて転向し、正反対の理想を追い求めたり、遂にはその理想を放棄せざるを得なくなつて、深い挫折感に沈淪しなければならぬことが往々にしてある。日本近代史は、日本に於ける社会主義運動、プロレタリア文学運動が、理想を廻つての分裂に次ぐ分裂の歴史だつたことを教えている。而も我々はこのような時に、人間の演ずる劇が屢々救い難い醜惡な相貌を呈するのを見て来た。理想は人を酔わせ、人を性急な行動に駆り立てる。「直ぐに決死隊に応募しさうな日本人的勇氣と正直さ」(洪水以後)①に廣津はその典型を見た。それは眞の勇氣ではなく、却つて人間の弱さ、精神の硬直を示す以外の何物でもない。

しかしだからと言って廣津を、理想を拒否して現実を無条件に容認する現実主義者と見るのは誤りである。理想に酔わないのは、理

想を拒否しているのではなく、酔うことを警戒しているのであって、若き日の廣津の「悔」に見られたような「憂鬱」も「虚無」も、その多くの由来をここに求めることができた。しかし廣津の「ニヒリズム」がその蔭に、健康な理想への探求心を隠していることは、「新潮」の特輯「最近の廣津和郎氏」(大13)で、早くも横光利一や舟木重雄らによって見破られているのであり、「若き日」の中で「実際は何かに向つての渴望が——自分でもはつきり解らない渴望が、形を取る術を知らずに私の心の中で荒れまはつてゐたのかも知れない」と自ら回想しているその形を成さない「渴望」こそが、廣津を寧ろ現実におし止め、虚無の深淵や耽美的世界に落ち込ませて、そこに安住することを自らに許さなかつたのである。

かくて、理想が人を酔わせて性急な言動に走らせる状況の吟味が、廣津の批評の核に据えられることになった。「思想の誘惑」「範疇の誘惑」という廣津独自の語彙が、この「洪水以後」の時評に始めてその姿を見せる。

思想や範疇の誘惑に身を任せるといふことは、結局は自らの思考を停止せしめ、生命の躍動を抑制し、延いては完全な自己放棄を招来することになる。正義を錦の御旗に押し立てれば、その他の凡ゆる推論や思考のあり方と手続きが否定され、空疎な理論の展開が自己陶酔的な饒舌を生み、それが人の精神を怠惰に導くにも関わらず、自らは勤勉と献身に身を投げ出しているという錯覚に陥る。人道主義、トルストイ主義、社会主義、民本主義、愛国主義等大正期を彩つた主義主張を、皆同列に扱ふことは許されぬにしても、これらの主義によって影響される人の心情には共通のものがあるのではないか。民衆は暗示にかかり易い、と廣津は言う。総じて廣津和

郎という作家は、民衆的基盤に立つ作家と見られているが、それを無条件で認めるのは正確ではない。寧ろ彼は、常に民衆から距離を置こうとしていた。「民衆には驚くべき狂信性がある。(中略)その性質は、方向さへ示してやれば、常に逆るやうな連動を開始する。」(「彼等は常」) 狂信する民衆は自己を喪つて、自己を犠牲にするものをそれと知らずに鑽仰する。民衆と距離を保つことなしに、民衆に犠牲を強いるものの正体を明らかにすることはできないだろう。民衆を観念的に美化しようとする者に対して、廣津が先ず異を唱えたのはそのためである。

× ×

「洪水以後」時評の中で、「思想の誘惑」論の適用が最も厳しかったのは、相馬御風の『還元録』批判に於いてであった。それはやがて全面的に展開することになる廣津の、トルストイ及び日本に於けるトルストイ主義批判の枠の中で捉えられるべき問題であった。

『還元録』(大5、2)は御風の、都会を捨てて故郷に隠棲して農民に同化し、「本當の自我に帰る」ことを志した時の心境を綴つたもので、刊行前後に主として「早稲田文学」に書いた凡人浄土論、凡人福音論を含め、謂わば「還元録事件」とも称すべき様々の反応を惹起せしめた。田山花袋は「近代の小説」(大12)に於いて當時を回想し、嘗ては国木田独歩も夢みたという田園生活に入った徳富蘆花、「偽りの生活を脱して、本當の生活をしよう、本當の生活の記録をつくらう」として「新しい村」に入った武者小路実篤の心境に、御風の隠棲の心持も亦近かつたのではないかと比較的好意的な感想を述べている。このように時代の流行現象として先ずこの「事件」を捉えてみるのが重要であり、この時花袋の挙げた三人

の作家が、何れもトルストイの影響を強く受けていることが示唆的だった。

廣津の『還元録』批判は、「洪水以後」八号と十号に見られる。

第一に、右トルストイ主義が、御風の退任の決意に深く影響したことから来る「農民の理想化に対する」警告がある。過去と訣別し、知識人の範疇を破壊した御風が、今度は「善人の範疇」を作つて欲しくない、とする廣津の要望には、ともすれば、民衆を概念化した上で祭り上げる時代の風潮に対する抗議も含まれている筈だった。

次に廣津は、御風の思想の変転著しき様を捉えた。実際、大逆事件以後の御風の思想はめまぐるしく動き、一時は大杉栄に接近してその影響を受けた節もあるが、社会主義、無政府主義についての着実な考究を試みた跡もなく、而もその言説は、時に自我主義に傾いたと思うと、時には言葉の枠を超えた具体性と方法意識を欠いたままで、社会改革の要求を性急に打ち出す嫌いがあった。現に『還元録』の僅か二年前には、「隠棲」とは全く逆の「巷に出でよ」(大3「早稲田文学」)の題のもと、「もつとく」熱烈な境遇革命論が出て来なければならぬ。自己革命と並んで、社会革命の主張が盛にならなければならぬ」と説き、「書齋裡の人は同時に街頭の人とならなければならぬ」と結語しているのである。

『還元録』に反応した数多い論評のうち、廣津のみが御風の思想の変転を視野に入れ、その変化の意味を問うものになっている。

「あなたには一つの思想に対する執着が少しもありませんでした。あなたはいつとも目の前の道は一つしかないと思つてゐながら、而も枝道へくゞと無暗矢鱈と曲つて歩きました」——これは廣津の用語に従えば「範疇」の移動である。「自分の靈魂をしつかり握つてゐ

る人間が、或る思想に移るまでには、非常に長い時と準備とを要します。」然るに、Aの範疇からB、Cの範疇へ余りに手軽に移るのは、一つの思想を掴まえると、直ちに感激して身をそこに投ずるセンチメンタルイズムの表れに過ぎない。人は御風の今回の隠棲は、決して手軽な移動ではなく、そこには過去の思想と生活に対する勇氣と謙遜に充ちた否定がある、と言うかも知れぬ。又、実際にそれを称えた評家もいたのである。しかし廣津の、対象の隅々にまで行き届く批評の眼は、如何に御風が過去の思想を強い言葉で否定しようとも、どこかでそれをかばい、寧ろ否定すること自体に、——無意識の裡にも——センチメンタルな快感を味わっているのを見逃さなかつた。他の評家が感銘した御風の「謙遜」すら、「無邪氣」の徳を欠いているために、一種の厭味になっていることが指摘されている。

廣津は既に「洪水以後」第七号の「思想の変化」(これが御風を念頭に置いた論であることは疑えない)で、もともと前の思想に対する執着の欠けている思想家は、何時又他の思想に移るか解らないのであるから、彼等の宣言や悲壮ぶつた態度には少しも信用が置けぬ、と述べていた。今、大正から昭和へかけ、民衆芸術論と言ひ、プロレタリア文学と言ひ、様々な思想が生れてそれが作家に影響し、文学が様々な思想によつて規定されて行つた事実を考えると、これは単なる御風に対する批判の意味を超え、未来の歴史を遙かに透視した——その中にはプロレタリア文学に於ける左傾や転向の問題を含み、そこに廣津が如何なる姿勢を持したが想起される。更にそれは昭和十一年の「結論を急がぬ探求精神」としての「散文精神」の強靱な生き方にも連つて行く——人間の生き方に対する根本的な考察を含んでいたことが理解され

る。そういう意味で「範疇の誘惑」論を核とした廣津の時評は、「大正文学的な思考様式」(小田切秀雄「廣津和郎 初期」)として括られるには余りに個性的であると共に、歴史に対しても、一つの現実的な有効性を持つ批評だったと言えるのである。

× ×

「洪水以後」の時代、廣津和郎が「洪水以後」以外の雑誌に寄稿したのは「チェーホフ小説」(大5・3) 一篇のみである。彼は「洪水以後」時評の筆を執りながら、逼迫した家計を支えるためにチェホフの翻訳を手がけていた。これを金尾文淵堂から「接吻外八篇」として刊行したのはこの年五月であり、この時「チェーホフ小説」に手を入れ、「チェーホフの強み」と改題した新稿を以てその序文に据えた。この時期の廣津のチェホフに対する傾倒ぶりが窺われる。尚この書の扉には、「此書を父上の膝下に捧ぐ」という献辞が記されている。作品が書けなくなつて沈黙している父柳浪に、却つて敬愛の念を抱いたという廣津和郎が、その父に他ならぬチェホフの翻訳を捧げたという所に、この時期の廣津和郎の一切が語られていような気がする。柳浪は自然主義文学に敗れ去つた旧型の作家である。廣津和郎は父を破つた自然主義の流れから出て、更にロシア世紀末文学の影響を受けた作家である。その廣津が父に関して次のように書いている。「父は人生の凡庸と醜悪に対して驚くばかりの鋭い感覚を持つてゐた。その感覚が父をして益々憂鬱に陥らしめた。」(「本村町の家」大6)——人はここに容易に、廣津がチェホフに与えて来た評言を重ね合せることができるだろう。

廣津とチェホフの付合ひの歴史は古い。明治四十一年刊行の瀨沼夏葉訳『露国文豪チェホフ傑作集』をこの年中学五年で読み、翌年

十二月母校麻布中学の校友会雑誌に「悲痛」の翻訳を送つて以来、大正二年までに四篇の翻訳翻案を発表し、大正三年には翻訳『キツス』を植竹書院から出している。「チェホフ私観」(昭9・6)によれば、早稲田大学英文科に提出した卒業論文の題目は、「消極的廃滅主義より積極的絶望主義」であり、その内容は、チェホフからアルツイバアシェフに至るニヒリズムの推移を扱つたもの、ということである。——ここで在学中の廣津が、教師の中でも思想の変転著しく、そういう意味では華かだつた片上伸や相馬御風よりも、休講の多かつた島村抱月に魅刀を感じた、という後の回想を思い出しておきたい。その魅力は、抱月の学問よりもその「廢滅的ニヒリズム」(年月のあしおと)②にあった、というのだから。——

早稲田大学を卒業する(大2・4)までの廣津の生活は、作家としての父の不如意な逼塞、継母を中心とした一家の不和、実兄の不行跡等々を抱えて惨憺たるものがあつた。この時チェホフや抱月の魅力を「消極的廢滅主義」と捉えたのは、自らの力では如何ともすることのできない謂わば不条理との闘いを強いられた所から来る彼の生活の憂悶がその背景にあつたからである。所が卒業すると、入営、毎夕新聞社への就職と退社、父の病氣による転地、その父への仕送り代を捻出するための翻訳活動、始めての下宿生活等々と、彼の生活が社会に向つて動いて来たばかりでなく、その下宿の娘との不用意な衝動的交渉による人間関係の重荷が彼の背にのしかかつて来た。その結果としての長男の誕生と、「洪水以後」の入社が殆ど同時だったのである。卒業までの彼の生活は、暗いと言つてもそれは彼自身の責任に帰せらるべきものではなかつた。然るに卒業後の暗さは、対社会との交渉という彼の生活範囲の拡大を背景に、彼の

責任に帰せらるべき女性問題に由来するものだった。

この間上記翻訳活動の対象がトルストイの「戦争と平和」であったということもあり、この時期、廣津の抱えた現実問題に何らかの解決を求める意味から、彼のロシア文学との激しい格闘が始まる。

この格闘から出て来たものは——結論だけ言ってしまう——トルストイとアルツイバアシェフの同時否定であり、チェホフ観の一進展である。傷ついた廣津にとって「クロイツェル・ソナタ」は、実行したとて何の意味もないことを「範疇」として人に強い「傷に塩」の物語であり（「怒れるトルストイ」大6・）、アルツイバアシェフは、当面する廣津の「責任」の問題に何の展望も与えなかった。

「アルツイバアシェフ論」に次の一節がある。「トルストイは苦痛を尊重し快楽を軽蔑する。アルツイバアシェフは苦痛を軽蔑し快楽を尊重する。／此二人の作者が現した人間の典型の間を、大概の間は彷徨してゐる」——作品の人物で言えば、前者の代表が「主人公と僕」のニキタであり、後者の代表が「サニン」のサニンである。この二人はロシア文学に極めて特徴的な謂わば抽象性を背負った人物である。その対照的な人物像には共に、現実には生きる「大概の人間」のリアリティが欠けている。チェホフの世界に出てくるものは、この「大概の人間」なのであり、又その「彷徨」する姿である。

「チェーホフの強み」で、「此処に一つの例を引く」と切り出して登場させられた「或る女」も亦、「彷徨する大概な人」の一人に違いなかった。チェホフがこの女の憂悶に対して与えた診断と処方箋に対する廣津の解釈には、嘗ての「消極的廢滅主義」的チェホフ観からの確実な進展がある。チェホフがこの女に対してどのような忠

告を与えたかを叙した後、廣津は次のように結論する。「これはチェーホフが如何に人間の虚偽を見逃さないかと云ふ事と、人を見て道を説く彼の聖者の風格と、そして彼の人間に対する深い愛と同情とが現はれてゐる。」⁽¹²⁾

ここには、自己の自然に飽くまで忠実に生きなければならない、とするトルストイ的強制とは異なるチェホフの静かな教訓があり、慣習や通俗的道德観宗教観等、一切の「範疇」から解き放たれて、自由そのものと化したチェホフがいる。と同時に、この小説からこのような独創的とも言うべきチェホフ像を引き出して来た廣津和郎の、自在で行き届いた人生への深い洞察力を見ることが出来る。そして廣津の、自己の責任に由来する生活上の悪戦苦闘が、却ってチェホフの理解を、今日のチェホフ像として一般的に認められている明るい方向へと深めたのは興味あることである。広津の回想の至る処で自ら認めているように、「責任」の自覚が、「消極的」な彼を奮い立たせたのだ。恐らくそこに、筆を枉げてまでも、身につかぬ新傾向の小説を試みるより、沈黙を選んで頑なに己れを持し続けた父の像が、新しいチェホフ像に重っていたのではないか。「父に対する責任の念」が、絶えず廣津を絶望の淵から救い上げる原動力になっていた、という風なことを廣津は「静かな春」^(大7・2)に書いている。チェホフの翻訳を父に献じた所以であらう。

× ×

廣津の「洪水以後」時評の背景に今一つ、「悔」——「若き日」でしか語られていない彼の失恋の物語がある。（僅かに「年月のあしおと」⁽⁴⁾に、それが事実であったことを思わせる簡単な叙述がある。）所が、「悔」の結末に「若き日」では削除された次の一節がある。廣津自

身と思われる主人公の失恋による青春の終焉を示すものだが、失恋と言つてもその主體的責任は主人公にあり、最後まで愛を貫かなかつたことが「悔」なのである。

「私は今になって、前にも述べた通り、女性に対するほんとうの尊重は、結局自己を尊重する事になり、女性に対する軽視は、結局自己を軽視する事になると云ふ事を悟つた。

それを人々に理解させるには、私はまた或一つの出来事を語らなければならぬ。……」

田中純はその「広津和郎論」(大8・4)の中で、右「或一つの出来事」を語つたものが「悔」と同時発表の「やもり」(新潮)であり、「悔」は女を失つたことの悔、「やもり」は女を得たことの悔を描いたものである、と指摘している。

主人公の恋人千鶴子は、主人公の友人である兄の監督を受けており、その兄はK・K氏(若き日)の清見貫山(茅原華山)の影響下にある。恋人もK・K氏の許に出入りし、例の青年達を暗示にかける言説の擒になりかかっている。この時、「悔」に於ける主人公のK・K批判は極めて辛辣であった。

「……その頃洋行から帰つて来て、同紙(萬朝報を指す)の一面に、始終論説を掲げては、ある一部の青年達の人気を博してゐた、あのK・K氏の事であつた。此人の論ずる方面は、非常に広がつた。政治、社会、文学、哲学、宗教、何でもござれであつた。そしてみづから自由思想家を以て任じてゐて、その頃文壇、社会一般に流行した、イブセン——イブセンからは、彼は『第三帝国』と云ふ言葉を引き出して、後に彼が発行した雑誌の名にまでそれを使つた。そして彼は『第三帝国』なるものの自分が主盟であると云ふ事を、

その雑誌の表紙に一号活字で麗々しく書き立てた。——オイケン、ベルグソン、さう云つたやうなものを、軽快に、簡単に解釈しては、それ等の名を聯ねる事によつて、彼の無内容の論文を飾り立てた。……丁度その頃の混沌とした思想界には、かういふ盲滅法な新しがり屋が出るのが、又自然なかも知れないなどと思つて、予ねてから此K・K氏なるものに軽蔑の念を抱いてゐた私は……」

恋人ばかりでなく、どうやら主人公に好意的な恋人の母親までが、このK・K氏の影響を受けていることを知つて、主人公は苦痛と不愉快に虐まれる。「『どれもこれも成つてない奴ばかりだ』私は何か腹立たしくなつて来て、こんな事を口の中で呟いた。」(4)——「悔」の中でK・Kに触れたこの辺りの部分は、事実としても正確であり、その本質をよく捉えた点での確な茅原華山論になつてゐる——だが主人公は、その「成つてない」陣営との交渉を「不愉快」に思う余り、遂に恋人を手に入れることを断念せざるを得なかつた。とすれば、そのような主人公自身が、別の意味で「成つてない」一人だつたと言わざるを得ない。

この時主人公は大学三年生であり、「W」大学に通ふ事つまつまらなさが、骨身に沁みて来た」という心境に達してゐた。別の文献によれば、前記の通り、彼はその時チェホフを「消極的廢滅主義」と規定する卒業論文に手をつけていた筈だし、島村抱月教授の「廢滅的ニヒリズム」に魅力を感じてゐた筈だつた。後年、抱月を論じた文章の中で廣津は次のように書いてゐる。「二葉亭が『浮雲』の中で、明治の出世主義の空しさに反撥してゐる主人公を取扱つてゐるやうに、この日本の興隆期に、その興隆の仕方の空しさを感じる空虚感が、意識してゐるにせよ意識してゐないにせよ、何か『まこ

と」を求める種類の人達の胸に芽ぐんで来てゐたのではないか。」
(25・4「改造」)——抱月をこの「種類の人達」に短絡させ得るものか否かは別として、廣津が抱月に感じた「虚無感」の内容をそのようなものとして認識してゐたことは間違いない。——とすれば、大學生廣津和郎の周辺にいた人物として、この抱月と華山程対蹠的な存在はなかつたのではないか。

前記の如く、茅原華山が甚だ掴み難い人物であることは事実で、ある時は彼自ら、皇室中心主義者たり帝国主義者たることを隠そうともしなかつたし、又時期によつてはデモクラット、急進的自由主義者という規定を自らに与えている。しかし窮極的に要約してしまつと、「新興日本帝国の前途に全幅の信頼と希望をおいた」「進化論の粗朴な信奉者」(山岡桂二「茅原華山の第三帝國論」)とする史家の説が最も妥当な見解であるような気がする。例えば労働問題を扱つた「相霏はす心」(第三帝國)^④などは、資本家の「温情主義」を称えるだけの粗笨な社会政策論で、当時山川均によつて敵しい批判(茅原の階級論^{大4}・)を受けたものだが、西欧の機械産業は学んでも、それを支えた産業精神は学べからず、といった主張を見てみると、華山が幕末の志士以来、今日に受け継がれた国家政策の柱である所謂「東洋道德・西洋芸術」の信奉者だつたことも否定できない。日本近代国家の持つ進歩と反動の様々な表情が、華山という人物に殆どその儘投影されているのだ。

明治の「進歩」にとり残された父を尊敬し、その興隆に空しさを感ずるような大学教授に理解の眼差しを向ける青年が、華山のような人物の空疎と輕薄とを見抜くのは寧ろ容易だつたかも知れないが、しかし彼には、如何にも華山の直系の弟子らしい、恋人の兄の

政治青年的センチメンタリズムと、進歩を装つた家父長的傲慢と闘つてまでも、その妹を奪取して来る実行力はなかつた。前記「広津和郎論」の中で田中純が、「知識のある者、心の正しいもの、感じの鋭い者は、何時でもエネルギーが弱い」というゴリキイの説を引いて、主人公をツルゲエネフの徒に見立てたのは正しい指摘だったのである。

作者としての廣津和郎は、愛する女性を獲得する道を自らに閉じ、愛してもいけない女性との性的交渉に落ち込んで、その人間としての責任の問題に苦しみ抜いた時、始めて自己の尊厳を確認する手がかりを掴み、それによつて「消極的廢滅主義」という暗渠からの出口を発見することができた。そこに落込んで身動きのとれなかつた自己を対象化する方法を掴んで始めて「神経病時代」「悔」「やもり」等廣津の初期代表作が創出される条件が整えられたのである。

一方、「範疇の誘惑」を斥け得る自己の確立が、「範疇」を強いるトルストイとの対比の裡に、新しいチェエホフ像を創造することを可能にした。彼は「チェエホフの強み」に於いて漸く、「性格破産」(これも廣津独自の語彙で、消極的廢滅主義を指す。ツルゲエネフの「余計者」もこれに當る)を描き得る作家(チェエホフ)が性格破産者である筈がない、という認識に達した。そこで廣津は、「洪水以後」創刊号で次のような第一声を放つ。「——あ、チェエホフが欲しい。今の日本にはチェエホフの材料が至る処に轉つてゐる。チェエホフの描いた鏡の中に現代日本の焦燥が生けるが如く映つてゐる。」(ペンと鉛筆)——「現代日本の焦燥」とは、漱石も指摘した、あの日本の「外発的」開化の齎した「輕薄」と「空虚」、「得意」と「神経衰弱」の交錯する悲喜劇に他ならない。廣津がその「現代日本の焦燥」を

擬視する批評家、作家として成熟して行くのはこれからである。「洪水以後」が廣津にそのための基盤を提供したのである。

注

1 抑々茅原健氏が祖父華山を調査する動機となったものが、「群像」連載中の「年月のあしおと」(昭36/38)に出てくる「洪水以後」の叙述にあったことの由来は、健氏の「茅原華山と同時代人」(昭60不二出版)「はじめに」で明らかである。尚廣津の「西片町時代」(昭17「芸術の味」所収)には当時の回想として、「洪水以後」の経営主任茅原茂(華山弟)が廣津時評に不満の意を漏した際、廣津は、自分の時評が雑誌の売行きに役立つか否かはともかく、「雑誌に品位を与へてゐる唯一のもの」であり、「現代の日本で最も好い文芸評論なのだ」と抗議した、とある。彼のこの嗚呼が強根無根の放言でなかつたことは、これらの時評を含む廣津の評論集『作者の感想』(大9聚英閣)が、後年佐藤春夫の『退屈読本』と共に「大正時代評論集の雙璧」(吉田精一)と評価されたことでも証される。

又廣津の批評家としての力量を認めて廣津を世に送つたのは、森田草平『論理の尖鋭と洞窟力』(大5・11「文章世界」)である。

2 「第三帝國」には華山による植民地放棄の「小日本主義」の主張が見られる。又華山は吉野作造以前に「民本主義」という言葉を使用したことになっている。「民本主義の解釈」(明45・5・27萬朝報)では確かに貴族主義、官僚主義、軍人主義に対する批判が展開されている。但し右二つの概念については尚立ち入った検討が必要であろう。

3 十八号 4 十九号

5 ①「茅原華山を笑ふ」(大4・2・19「時事新報」)
②「恥と貞操と童貞」(大4・4「新公論」)
③「華山の論法」(大4・11・29「第三帝國」華山絶縁号)
④「茅原華山論」(大4・12「中央公論」)

6 江木衷「茅原君の麥節改論に就て」(前記絶縁号)参照。又華山と石田の共通項は「君民同治の第三帝國」であるが、その対立は「君」と「民」

の何れに重心を置くかの争いだつたようにも思える。華山の「新皇室中心主義」⑦などはもはや「民本主義」の範囲を逸脱したものと見える。分裂の直接の原因は、華山が「模範選挙」と銘打って出馬した衆院選に落選すると、忽ち立憲代議制を否定したことであり、これなど華山の「麥節」の最も滑稽な一例であつた。

7 ①「女子を論ず」(明35・5「中央公論」)

②「女子崇拜」(明44・6・21萬朝報)

③「婦人の自己発展」(大2・2「女子文壇」)

④「男は雄伏し女は雌飛す」(大5・3・1「洪水以後」)⑦

⑤「女を何うしたらよい乎」(大5・5・8「中央公論」)

8 榎林混二「初期の広津和郎」(昭41・5「近代文学試論」)

9 今回読み得たものを挙げる。石田友治「近代文明と真実生活」(大5・2・5「新理想主義」)、山村春鳥「悲壯なる幻滅者——相馬御風氏について」(大5・2・15同)、三井甲子「相馬御風の発心」(大5・4「文章世界」)、磯部泰治「還元果して唯一の道か」(大5・4「新潮」)、佐々井晃「相馬御風氏の近著『還元録』を読む」(大5・7・1「15」第三帝國)、和辻哲郎「罵倒と生存競争と凡人主義」(大5・8「新小説」)

10 前記「チエエホフ私観」によれば、チエエホフを「消極的廢滅主義」として捉へていた卒業論文の解釈は、シエストフの「チエエホフ観に近いもので、「チエエホフの強み」ではその解釈が違つて来た、ということである。卒業論文時のチエエホフ観は、その題名と、シエストフの「虚無よりの創造」の内容から推し測るしかない。即ち「底抜けの絶望」(正宗白鳥「チエエホフ論」(昭9・4「文芸」))を歌つた詩人という観方である。又、「トルストイとアルツイバアシェフの同時否定」と言つても、それが彼らとの長い格闘の末のものであることは、関係諸論文の示す所である。廣津和郎—金子洋文論争(廣津「鎌倉より」大6・1・23「25」、「鎌倉から」同3・23「27」説売)、金子「廣津和辻両氏の論評を嗚と」(大6・3「日本評論」)にも、その格闘の一端は窺われる。

11 「アルツイバアシェフ論」(大6・5「早稲田文学」)、「アルツイバアシェフの生命観」(大6・6同)、「作者の感想」に併せて「アルツイバアシェフ論」)

12 「チエエホフ私観」で、この小説が「女天下」であることを明らかにしている。訳名としての通称は「女の王国」(中央公論社版全集⑨所収)

である。すると廣津のこの小説からの引用や解釈は、かなり恣意的であることがわかる。これは廣津の作家論の至る所に見られる現象で、事実関係の不正確さと、廣津評論の自在な面白さが、彼に於いて裏腹になっている趣がある。旭季彦氏が『チエーホフ』（昭54新興出版社）で指摘しているように、廣津の引用や解釈は「我田引水のきらいはあっても狙いは確か」なのである。「チエーホフの強み」が全体として、今日のチエーホフ観の水準に徴しても、極めて秀れたものであることは、専門家達の証する所である。（池田健太郎「広津和郎の『初期短篇』」昭51・8「新潮」、同「チエーホフの影」昭51・9同、同「広津和郎におけるチエーホフの問題」〈岩波講座・文学⑩〉、佐藤清郎「廣津和郎とチエーホフ」昭53・6「ユリイカ」参照）